

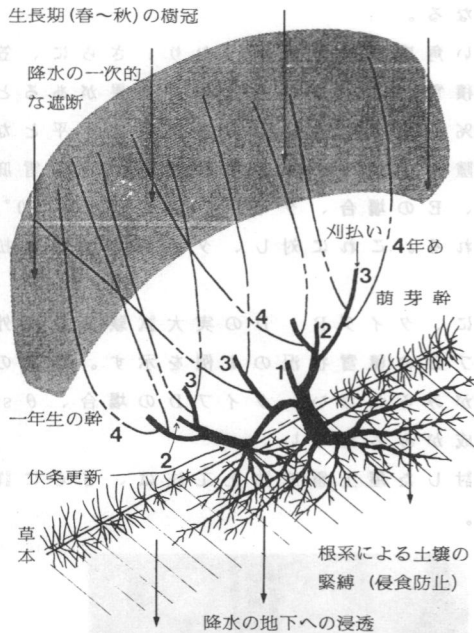
スキー場斜面を維持するための木本萌芽幹の刈払い方式について

(でじこく 斎藤新一郎(北海道立林業試験場) 斎藤新一郎)

山岳地の急傾斜の土地において、森林を伐開して造成されるスキー場は、外来のイネ科牧草を主とした草生地として維持されている。しかし、草生地は、以前の森林と比較すると、自然環境の調節作用において、いちじるしく劣る。また、スキー場斜面は、導入牧草類の生育に適しているわけではなく、周りから侵入してくる自生の草本および木本を刈払うことによって維持されているのである。この木本をうまく利用することによって、以前の森林環境に近い機能をもったスキー場斜面を維持できる、とみられる。

そこで、スキー場斜面における木本萌芽幹(刈払い株)を、旭川市旭山および札幌市手稲山で調査した。旭山の場合には、ススキ草原の中に多数の木本が侵入し、毎年初冬に刈払われ、生長期には旺盛に萌芽によって繁茂していた。しかし、手稲山の場合には、高標高でもあり、地際で刈払われていて、萌芽幹の発生が不十分であった。

生長期(春～秋)の樹冠



生長期における刈払い株の繁茂

この刈払い株は、地上高が20~30cmであれば、生長期には高さが1~2mの低い樹冠を上げる。この連続した枝葉群(低い林冠)は、草生地とは大きく異なり、伐開される以前の森林にかなり近い環境保全・調節機能をもっている。つまり、低林冠は降水を受け、根系は地表を緊縛し、保水力をもつ。そして、積雪期には、この刈払い株は、「生きた杭」として、雪止め効果をもつ。こうした、1年を通じての、かつての森林の代償としての刈払い株は、積極的に育成されるべきであろう。

木本の刈払い作業および刈払い株の存在は、スキー場の管理の面からは負担になるし、シーズン入りもいくらか遅れることになる。しかし、かつての森林の機能を考えるなら、この程度のマイナスは容認すべきものである、といえよう。

参考文献

- 斎藤新一郎, 1984. 旭川市旭山スキー場における木本侵入と人為干渉について. 日林北支講集, 33: 86~88.
- ・成田俊司・清水 一, 1987. 手稲山における森林植生の現況と保全対策. 自然環境保全対策実態調査報告書, p. 87~113, 北海道生活環境部環境保全課.
- 只木良也・吉良竜夫, 1982. ヒトと森林——森林の環境調節作用. 323pp., 共立出版, 東京.